

研究通信

№ 43

1962・7刊

村落社会研究会事務局

仙台市片平丁75
東北大学 教育室
社会学 研究室

初心を忘れないようにしよう

中 村 吉 治

村研が発足してから十年、最初の会を開いた仙台で今年の会が開かれるということになった。この辺で一度いままでの経過を反省するのでもいいことだと思ふから、それには適当な場所だろう。

「社会学者」の人たちから、村研結成の呼びかけをうけた十年前に、私たちが喜んで応じたのは理由があつた。私たちは「歴史家」として、またそのうち「経済史家」として村の歴史の研究をしていったのだが、いくつかの村について「経済」現象だけ抽出してみても生きた村とその歴史はわからず、経済史として対象をせまくとつても、やはりそれでは不完全であることを痛感し、そのワクを脱するため一村の中で何もかも調べてみようという大胆不敵な計画を立て、岩手県煙山村調査に着手したところであつた。もちろんそれは大変なことである。そのとき、社会学者の、または民俗学者の、意見や成果を聞くことができそうだといいことは、願つてもないことだつた。専門分野の人たちが、相互にその意見を交換し、質問をだしあい、問題を出しあひなら、総合的に村の研究の進歩が推進されるだろう。社会学者の調査報告に経済的な問題が欠けているとみられるところは、われわれがお手伝いできよう。そういう話しあひの場ができるということを考えて、私たちは村研結成に及びつたの

であつた。その上に、各人が各地で、各自の問題や方法で村をみてゐるのだから、おたがいに「私の見た村」を報告しあえば比較もいゝろんな意味でできるだろうという期待も一ぱいだつた。こういう考えを、当時の結成の参加者は、例外なくもつていたのである。少くも私たちはそのつもりだつた。

それから十年、私たちの期待は、ある程度はむくいられた領はするが、必ずしもそうでない傾向も出てきたように思われる。何をやつていようと、村という点では共通の話題になるはずだけれど、その共通の場がそこに作られるより先に、あんなことには興味がないとか、あれではしようがないとかいつて、たがいにそつぽを向いてしまふという場合が多くなかつた。批判という笑名で、自分のワタシの研究を否定することはなかつた。現況をやつてゐる報告に歴史家は背を向け、歴史をやつてゐる報告に経済学者はあくびをしてゐるといふことはなかつた。そうでなかつたとはいきれないと思ふ。そのため報告者はそれぞれに分化してしまふことが感じられる。共通テーマを設定しようという動きになつたと思ふ。共通テーマ、共通課題ということは、実は村研では村という点であらかじめあつたのである。それをふまえた上で、さらに問題をしぼつて共通の問題をやつてみるというのは当然ともいえるが、そもそも基底にある村という共通課題がうすれ、忘れられて、しぼられた共通課題でむりやり討論の場を作ろうといふのであれば、それはむりやり会の分裂を防ぐだけのものになりさがるだろう。そんな傾向を私などは感じてゐる。今年の共通課題では参加してもいいことはいし、聞くこともないといふ会員が多くなつてくるのではないか。どんな課題であろうと、村に関してゐるのだから、何かいえるし聞いて教えられることもあろうといふのでなければ、村研の存在の意義はうすれてしまふのみならず、悪い結果さえ生れるであらう。

村研は初心を忘れてはならぬ。そういう感じを、今度の会の準備の集会るとき話してみたいところ、仙台に集つた諸君の意向もそれに近いことを知ることができた。これを全会員にも考えて欲しいとい

課題その他あれこれ

(仙台) 木下 彰

うのが私の念願である。そして私の個人的な希望をいえば、いろいろに集つて、各人が各地でみてゐる村の、いろんな角度からの姿をふくぞうなく話しあつて、村に対する理解を深めてゆく、そういう談合という心がまえで集るのが本當の意義ある会であると思ふのだがどうだろう。のんきなことをいつていとお考えの方もあろう。そんなとりとめのない、ひま人の会合は無意味だという方もあろう。しかし、私はそのようにのんきに見え、とりとめなく見える話の中で、もつとも基礎的な、またもつとも今日的な問題が、真に理解されてゆくものであると確信している。それにはもちろん、真にモノグラフイックな報告のだしあい、話しあいであるべきだという前提はある。空虚な議論をしあうのは、威勢がいいから、それ故に学問的であるような外観は呈するけれど、むしろ悪い意味でののんきな話で、地につかぬ時代離れしたやりとりで終るだろう。

ここに反して、外観的にはのんきなような報告でも、具体性をもつた、モノグラフの報告交換こそ、現在にもつとも大切な問題をつけてゆく生産的な談合になると私は考へる。これは当番としての仙台の会員が大半を一致してゐる考へかたと思ふが、私は私なりの文字通りの私見として、会員諸君の御検討を願つたと思ふ。

昭和二十八年の秋、仙台で才一回大会をもつた村研は、この秋またここで十周年大会を開くことになつた。その間われわれ在仙の会員は、宮城県鳴子温泉における才六回大会開催にも関与したのであるが、とにかく十年なんて早いものだと思つて感ずる。「通信」前号で、竹内教授も述べられているように、この十年間の村研の歩みは決して素晴らしい発展ぶりとはいへたものでなく、いわば十年一日の如く細々と、しかも短いものであつた。私個人としては、丁度自分の勉強が少しも前進しなかつたこと十数年間と相通するものがあつて、ひそかに慰められる感じであるが、しかし他人のこと——村研は決して他人ごとではないが——となると批判し易いもので、村研も十周年を転機に新しい発展を期すべきであると考へたりしている。

細く長く生きるのはたしかに堅実であつて、村研としても会員の数や組織等の発展について何も無理に背伸びする必要はない。もちろん、量的発展も必要であり、かつ好ましいことであるから、若々しく清新な研究者を毎年着実にむかへ入れたいものである。もし、そのような会員が殆んどふえていないとすれば、その原因を追及することが必要である。近時社会学界では、新人の関心が農村問題から遠ざかりつつあるように聞いているが、経済学の領域では理工系に劣らず就職が好調なのと研究者の生活や地位が劣悪であるといつた問題と関連して、大学院進学者は極度に減少し、この研究者養成コースは一般的に全く魅力のない存在と化してあり、したがつて、農業経済学を志す新人はやはり甚少ない。村研の青年会員数の伸び悩みの理由が、右のような客観状況のうちにあるものとすれば、それは一応止むをえないであろう。しかし、このような理由の外に、村研の活動が若い人々に魅力を与えないというようなことがないであらうか。われわれの集りは、社会学・経済学・歴史学その他いろいろの専門分野の研究者のなごやかで、しかも科学的精神にみちた学術的交流の場をつくりだすことをねらつてきたものである。その点、在来の学会とはいささか性格のちがつたユニークな存在であるといわれ人ともに確信しているが、それだけにこの共通の場をスムーズかつ積極的に発展させるための年々の共通課題の選択はむづかしい。もちろん、テーマの選定にあつては、いつも真しな討議が行なわれてきたから、その方法はもとより導き出された結論に対し、いまさら文句はないのであるが、個人の感想からすると、テーマがいわゆる共同体の問題にかかわり過ぎたり、政治体制や実践論的な組織論に傾斜しがちのように思われた。この上

うなテーマや問題意識の方が、学生はもとより若い研究者たちに魅力的かもしれないが、それにしては若い人が余り寄りつかない過ぎるのである。

このような見地からすると、通信前号における田原音和君の「二つの問題」は極めて示唆的である。社会学的概念規定や研究方法についての問題提起であるが、いわゆる組織論を構想論とは別にはなく、後者のなかで位置づけを行なうとともに、村落構造の変動過程を単に運動論的に把握するだけでなく、むしろこれをも構造的視野で分析する必要があるとされているように思われる。これは、われわれ農業経済の研究者にとつても必要にして、また正しい態度である。ただ社会学ではこれらの現象を主として人間関係で切つて行くのに対し、われわれはそれらを資本の動き或は経済動向と対応させて把握するという相異がある。それはともかく、農村の構造は常に変動しており、その変動はいわば外からの特定の政治体制の影響力と内からの農民の主体的運動——組織活動によつて実現・展開するものであるが、組織や運動が対応するのは構造であり、変動するのも構造であるから、われわれが最終的に知りたのは村落構造の性格と形態自体ではなからうか。

ところで、村落は大きく変貌している。村研でも前に「戦後農村の変貌」を課題としたが、それは主として農地改革その他の諸改革による農村の変化を追及したのであつた。農

地改革の村落構造に及ぼした影響は甚大であり、これを経済学や社会学の立場から測定・把握する事はまだまだ完成の域に達していないから、われわれはこの課題を捨て去るわけには行かない。しかし、農地改革によつて大きく変つた農村は、その後のわが国経済の新しい展開、近代工業の急速な発展とそれに呼応した都市の発展、とくに四大工業都市を中心とする工業地帯の目覚ましい発展によつて新たに大きく変動している。それは、村落の都市化現象の進展であり、農業の近郊農業化の傾向を指すのである。農村が都市的農村となり、農村に工業が新しい立地を求めることが進むにつれて、農民家族の構造も急速に変化し、農家はとりととして兼業農家化している。このような地帯を中心として、村

の性格はかくして革命的な変動を示しつつあるが、このような変動の様相とその根拠及び意義を追及することは、必ずしも時流に迎合する行き方というべきではないのでなからうか。私はこのような問題に、村研の関心が向うことをひそかに期待しているのである。

雑感

内藤 莞爾



村研の大会も、今年で十回をむかえることになつた。そして会場も、ふりだしに戻つて仙台で開くことになつたという。早いものだ。

その成長率は、正直いつて、つとして派手なものではなかつた。けれども日本のムラをどう捉えるか、この点での功績は、をどう捉えるものがあつたと思う。ことにムラを研究している人たちが、ことに史学・経済学・社会学などの人たちが、ザツクパランに話さうなほ、よその学会では見られない。批判もあるようだが、あのようなムードは、やはり強していきたいような気がする。会員がふれば、そういういつまでも「同志的結合」のようなことをいつておられないかも知れない。無責任なようだが、そのときはそのときでいいのではないか。

ぼくは、日本のムラをどう捉えるか、その点で村研のつくしたところが大きい、そう書いた。今までのところ、村研は大休、日本のムラに問題を集中してきた。またその日本のムラも捉えたという段階ではない。もつとも捉えてしまつたら、もうやることはない。だから、これは当然としても、ぼくのいいたいのは、そのための方法的な論議を積み重ねてきた、その点の功績を認めたい、というのだ。印象的だつたのは、村落共同体の捉えかたではじめはどうなるか、実ははらはらしていた。むろん総合的見解に通じたのではなかつた。が、共同体の規定にしても、それぞれバラバラのものでない。少くとも、おたがいの立場を尊重しあうべきだ、そんな空気になつたのは一歩前進どころではない。大きき収穫だつた、とぼくなどは考えている。それから村研

たえようではないか。

村研への希望

(仙台) 島田 隆

も、そろそろ国外のムラにも手をつけていい時期ではないか。とりわけ米作りのアジア地区のムラなど、良いテーマではないか。総合研究や他の学会でも問題としているテーマではある。と同時に、この方面の研究は、実は終戦でたち切られた。惜しいことである。日本のムラも判らないくせに、というご意見も一応もつともである。けれども、アジアのムラを理解するとき、現在のところ、日本のムラを照準点に置かざるをえないような気がする。その意味でも、われわれ同志のなかで、その方面に出発、あるいは再出発する人の出るのは、自然の成長ではあるまいか。

「同志」だとか「同志的結合」だとか書いて、気のついたことだが、村研にはどだい会則のようなものがあつたかどうか。この会の誕生には、ほくも関係しているが、このことは、すつかり忘れていた。申しわけないがその通りである。でも考えようによつては、「帝王、なんぞわれにあらんや」(楚辞)という治政の理想だともいえる。それから「帝王」でまた思ひだしたが、村研には初会以来、白髪(?)の老人が、世話役の席に座つてござる。この老人が会長さんかどうか、その点も忘れた。十周年で表彰でもしたら、おそれくご機嫌が悪いだろうが、とにかく会の成長や団結に、この人の人望と学殖とが果たしたところは大きい。仙台は高校時代の古戦場とも聞いている。大会では、大いにその徳をた

村研の才十回大会がまわりまわつて仙台で開かれる。この十年間、私も加えてもらつている東北大学の日本経済史グループ全体のことといえ、岩手の煙山村と諏訪の今井村、岡谷市域の調べに終始したといつていい。思えば、牛にも似た歩みであり、また昨今の村研大会のテーマとも一見かけはなれた内容の勉強であつたが、それも、村落社会の問題を広く歴史的発展のなかでとらえようという私たちがなりの考えあつてのことだつた。その間には、この二カ村や、これと関係して宮城県南郷・鬼首などの調査報告が大会にのせられたし、そのほか全国の村落調査の報告がつかさねられたなかで、鳴子大会のように村落構造の本質論についての討議もあつた。その鳴子大会では、具体的な報告とそのあとの抽象的な討論とががみ合わず(研究通信三〇号、矢木氏の指摘)、折角の機会を惜しんだことであつた。そののちも、村落研究の各部門、各個人の間で、理論と実証をとおして研究の共通基礎をつくり出すために充分な機会と成果が少なかつたように思う。

そのためか、田原氏の提案(研究通信四二号)なども出てきたと思われる。氏のいう構造論・変動論や組織論・運動論の意味や位置づけについての疑義はあるだろうが、それはさておき、「構造論における社会学の諸概念を一度ゆつくり皆まで再検討することとか、「村落の構造や変動をしつくり見究める」とことを強調する気持には、大いに賛意を表したい。このような仕事は、やはり村落研究の基本になるべきもので、あえていふならば、こんどの大会を含めて今後の基調にしてみたい。農民組織なり農民運動なりの客観的研究も、実はそのなかで充分位置づけることができるものと思ふ。

そこで、しかし年一回の大会や年報だけの交換では、村研の基本的課題の追求はなかなかできないであろう。一九五八・九年度事務局の提案(研究通信三〇号)やそれをうけた塚本氏の意見(同三一号)などのように、支部組織やその共同調査の必要性も考えられよう。ただ、科学の一部門においてさえ共同研究はむづかしく、数部門共同の本格的な研究は一層むづかしいであろう。仙台での共同研究(「北上川」)でもその点は指摘できよう。にもかかわらず、いずれは数部門共同の研究こそが期待されねばならず、そのために、村落という共通対象を統一的に把握できるようなパイ・スペクティヴをもつた方法論を、各部門での対象分野の事案から組み立て

ることが急務である。さきほどのべた私の属しているグループもそういふつもりで勉強していることはまちがいない。

毎年の大会や年報、また通信がこうした方向をしないでいくつくりあげていく強力なテコになるより運営されることをねがいたい。東京の情況にのみ即した言ひ方になつたが、実は全国的な問題と考へて、私一個の希望をのべたわけです。

● 新入会員として ●

(仙台) 佐々木 交賢

私は、従来から非常に大きな関心は持つていましたが、今度初めて村落研究会に入会した者です。今年の村研大会が仙台で開催されるし入会したらという友人の勧告もあり、自分も好機だと考へて思い切つて入会した次第です。

十年前村研が結成されて以来、数々の優れた業績を著実に挙げてきた事を間接的には知つていました。と申しますのは、私は残念な事に、大会には一度も出席した事がなく、ただ年報に眼を通し、周知に在る会員の方達から大会の模様を耳にするに過ぎなかつたからです。

それでも、年報を手にし、大会の模様を聞くだけでも村研の努力と成果、大会での発表、討論の活躍さがわかり、内心驚いていました。

私も農村出身というだけの理由ばかりではなく、日本社会において農村、農業が有する意義という点からも農村の諸問題について強い関心を持ち続け、また実際に調査に従事して来ました。しかし偽りのないところ、自分の調査の結果と比較して、村研の研究成果の大きさと大会での討議の活躍さに心理的圧迫を受け、村研の会員でなければ農村を語る資格はないのかも知れないという気持ちに襲われた事がありました。私も農村調査に當つては、従来と全く異なつた新しい角度からアプローチして農村の全貌を知り、農村の本質を把握するとともに、調査法、調査技術についても新機軸を出したいという意欲だけは人一倍もつていました。しかし農村とはいへ、その性格と構造は極めて複雑ですから短日月で農村の全貌を知りつくし、調査理論をつくりあげるといふ事自体無理な注文でした。

今述べたような、自分に対する負い目をもつていたため、村研に加入しても自分が益々惨めな心理状態に陥るばかりだと半ば恐れを抱いていました。けれども、友人の勧告があつた時、やはり村研に加入して多くの方からむしろ積極的に知識を摂取し、また自分の意見についての批判を乞う方が今後の自分の研究にとつて大きなプラスになると思い直して加入した次第です。そして加入した時、新しい喜びを発見しました。それは私が加入したのは村落社会研究会であつて、日本村落社会研究会ではなかつたという事です。と申し

ますのは、もし日本の村落社会の実態と性格を正しく知ろうとするならば、やはり外国における文化(社会)人類学等々の研究成果を充分評価して、それによつてとりあげられてゐる諸社会との比較対照によつてこの目的実現がなお一層可能となるからであり、また極めて陳腐ないい方かも知れませんが、人間社会は各々その特殊性を有していると同時に、人間である限りで、いかなる地域の人間社会にも必ず普遍的な原理が存するから、そうした普遍性と特殊性の両側面を知る事は是非必要で、今後村研がそうした方面での研究にも力を注ぎ、出来れば外国の諸社会の実態調査にも乗り出してくれる事を期待し得るという事を発見したからです。しかも村研には社会学・経済学・民俗学等々多様な分野での専門家が加入しておられるので文字通り総合的調査が可能となるわけです。同様に国内の村落の共同実態調査も期待し得ます。課題研究の方法としては各種の有益な方法がありましようが、各専門領域の人々が同一の対象地を共通課題の下で調査する方法もまた大いに有益であると思ひます。しかしそれだけでなく、課題研究と平行して自由発表にも大いに機会を与えてほしいと思ひます。モスの表現を借りるまでもなく、我々が社会の本質を正しく認識するためには全体的社会現象の把握に意を用いなければなりませんし、種々の社会現象が相互に有機的に関連しているという事から、自由発表でとりあげられる諸現象、

諸問題についての考察が課題研究でとりあげられる諸現象、諸問題についての考察と密接な関連を有し、両者が相互に補足し合い、そこから相互に示唆を受ける事が出来る事を期待し得ますし、そして自由発表を盛んにし、課題研究と有機的に関連させる事によつて村研の多面的な活動が出来るからです。また、今述べた社会諸現象の有機的関連と結びつけて申上げたい事は、これ迄日本の農村研究では同族論、構造論、共同体論と各種の理論が展開されて来ました。そしてこのような理論の展開は何によつて村落の本質を正しく把握する事が出来るかという問題ともつながつていたと思います。しかし、これ迄展開され、とりあげられて来た理論、問題のどれか一つだけが村落の本質を理解する唯一の鍵ではなく、換言すれば、あれかこれかの問題ではなく、これ迄の理論、問題を結集して総合的な考察を加える事によつて初めて村落の本質を理解する事が出来ると考えますから、村研の誕生十周年を記念して、これ迄の研究成果の総整理、集大成をしてみる事も一つの案ではないかと思ひます。また、村落本質の理解の問題は同時に研究方法の問題でもあるわけで、最も基礎的なことも知れませんが、調査方法を如何に確立するかという問題も重要かと思ひます。そして、実態調査といえはすく理論と調査の關係が云々されますが、この事は村落研究が、村落の研究自体を目的とするのではなくて、それは人間の真実の姿を知るた

めの足掛りに過ぎない事、つまり、どのような社会でも展開される人間の姿が村落でもまた展開されているのであるという事を認識し、人間が過去から繰返しくりひるぎて来たし、また将来も繰返してゆくであろう姿を把握する態度を忘れない事によつて、両者の關係の問題解決の道もおのずから開けて来るのではないでしようか。ですから、今後私は決して村落社会という字句に拘泥しないで、人間社会の本質を探究する為の場として村研を理解し、のびのびと自由に振舞いたいと思ひます。

最後に、各学界的展望と成果の紹介については会員以外の方々の優れた業績にも眼を通して下さる事、出来るだけ会員を多数獲得されるより希望します。

全く素人のような、見当違いの勝手な事を乱雑に並べたててしまいました。しかし加入した動機と、今後の自分の在り方、村研に希望する事を私なりに率直に述べたつもりです。

☆ 事務局 だより

△去る六月十八日、在仙の会員二十名余りが集つて、秋の大会の事を中心に話しあいました。とにかく十年目だといつので、にぎにぎしくも味のある大会にしたいものだといふことで、真剣に意見をおかしました。中村先生や木下先生の玉稿は、その間の空気をふまえたものです。御熱誠を願ひたいと存じます。

前にやりたいといつので、十月三十一日と十一月一日の両日に、東北大学の農学研究所講堂と仙台郊外の作並温泉河合ホテルで開くことに決めました。三十一日(才一日)は東北大農学研究所で研究発表を行ない、夕方それをすませて、バスで河合ホテルにくりこんで懇親の夜をもち、翌十一月一日(才二日)はそのホテルの大広間で共同討議をもちたいと思つています。まさに秋はたけなわ、紅葉のころです。仙台のわれわれでさえ、秋の作並温泉行きを楽しみにしています。

△ところで、秋の大会の共通課題ですが、すでに、打合せ会出席の方々の玉稿に知られるように、余りぎすぎすしたことにせず、あえていえば、農民組織の存在形態ぐらゐのとこるで、ムラについて語りあいたいと存じます。右のことについては、御意見も多いかと考えます。その御意見は、是非作並温泉でゆつくりうけたまわりたいと思ひます。そんなところから話しあつてみることも、今の村研には必要なことだと信じています。

△在仙の会員は、どうしても一人でも多く秋の大会に出席していただき、どしどし御意見をのべ下さることが大切だと確信し、そのことを切願ひしています。

△いつものことで恐れ入りますが、会費をまた身辺の移動などを、事務局までお寄せ下さい。

— 以上 —